



イスラーム過激派：パリの雑誌社襲撃事件 (4)  
「アラビア半島のアル=カーイダ」が犯行声明を発表

2015年1月14日、インターネット上で「アラビア半島のアル=カーイダ」幹部のナスル・ビン・アリー・アーニシーが、フランスでの『シャルリー・エブド』紙襲撃事件をはじめとする諸般の攻撃を自派の作戦であると主張する映像が出回った。



写真：声明映像のタイトル場面

アーニシーは演説の中で、パリで開催された「反テロ」集会に参加した各国首脳をアフガン、カフカス、ガザ、シャーム、イラク、ソマリア、イエメンで人殺しをしている連中ではないかと非難した。特にフランスを、「アメリカによる犯罪全てに参加している。フランスこそが、マリ、イスラーム的マグリブ、中央アフリカでのムスリムに対する犯罪の主体だ」と非難した。また、演説ではムスリムに対しあらゆる方法で宗教や預言者を守るように呼びかけ、その手段として欧米諸国の産品に対するボイコットを例示した。さらに、欧米諸国への要求・脅迫と解釈しうる内容として、「預言者と聖なるものへの中傷をやめよ。流血をやめよ。我々の土地から出て行け。我々の資源の収奪をやめよ。さもなければ、あらゆるテロと悲劇から逃れられないぞ」との発言を含んでいる。さらに、『シャルリー・エブド』紙襲撃を自派による作戦であると明言し、「対象を選択し、計画を立て、資金を出し、指揮官を選び、次いでアイマン・ザワーヒリー師の命令を実行した。ウサーマ・ビン・ラーディン師の遺訓を実行した。作戦司令官のアンワル・アウラキー師と連携した」と主張した。一方で、警官射殺やユダヤ教式食品店襲撃については、『シャルリー・エブド』紙襲撃と同時にムジャーヒド(=ジハード戦士の意。)が実行したと言及したが、こちらについては組織の関与について特段触れなかった。

## 評価

今般の映像には、実行犯の遺言や作戦の準備・実行場面のような、「実行者のみが知りうる内容や情報」は含まれていない。しかし、「アラビア半島のアル=カーイダ」が襲撃を自派の作戦と明言したことの意義は大きい。この映像、及び9日に出回った「アラビア半島のアル=カーイダ」幹部のハリス・ナザーリーが事件に言及する映像は、いずれも同派にとっては正規の製作部門が作成し、正規の経路で発信したものであり、2点の映像が「本物である」ことはほぼ確実である。無論、声明・映像類が「本物である」と、その内容が「事実である」ととは別問題であり、同派が実際どの程度事件に関与したかについては今後の捜査や検証を待たねばならない。

その一方で、作戦を「アイマン・ザワーヒリーの命令を実行して」行ったと述べた部分は、現在アル=カーイダと「イスラーム国」との間で生じているイスラーム過激派の中での主導権争い、威信・名声の獲得競争の文脈で非常に重要である。アル=カーイダと「イスラーム国」との競合では、華々しい「戦果」や「イスラーム統治の実績」を派手に広報する「イスラーム国」が優位に立ち、報道機関の関心やイスラーム過激派支持層から寄せられる資源をひきつけていた。そこに、「アラビア半島のアル=カーイダ」が今般の事件を「ザワーヒリーの指示に基づくアル=カーイダぐるみの作戦」と位置づけることにより、劣勢の挽回を図ったものと考えることができる。

さらに、「イスラーム国」が戦闘員の勧誘・受入れのような欧米からの資源の調達を活発に行っていることに鑑みると、今般の事件を契機にそうした資源調達への取締りが強化されることは確実であり、資源調達の面でも「イスラーム国」に打撃を与えうる行為であることにも留意すべきである。アル=カーイダは、「イスラーム国」による「カリフ国」僭称やイスラーム過激派諸派に対する忠誠の表明要求、さらには斬首にまで批判を強めており、両者の間で和解や調停が実現することは考えにくい。ここまでの情勢の推移からは、国際的なイスラーム過激派の活動が、アル=カーイダと「イスラーム国」との間の資源・威信・名声の奪い合いや足の引っ張り合いのような状況に陥り、混乱・衰退へと向かう可能性が読み取れる。

(イスラーム過激派モニター班)

---

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

©各種情報、お問い合わせは中東調査会 HP をご覧ください。URL : <http://www.meij.or.jp/>